

目 次

blue moon に恋をして	5
FLY ME TO THE MOO	V ······150

ローグ

6

抱き寄せられた瞬間に、 自分もただの女でしかなかったのだと思い知る。

名前を呼ばないで。そんな聞いたこともないような、 甘い声で……

最後の理性も、 ためらいも、 その声に溶けて消えそうになる。

吐息の重なる距離で見つめ合う。男の瞳に宿る情欲の輝きに、 女としての本能が騒ぎ出す。

ずっと憧れだと思っていた。ただの憧れだと思っていたかった。

なのに、今この瞬間に、はっきりと自覚する。

この想いは恋だったのだと

気づきたくなんてなかった。 囚われたくなんてなかった

近づいてくる唇を避ける術がわからず、 夏澄は泣きそうになる。

自覚したばかりの恋が、 夏澄の心を惑わせた。

触れ た唇の思わぬ熱さに、夏澄は震えるまま瞼を閉じる。

それ以外にどうすればい いのか、 わからなかった。

唇に触れる吐息に、鼓動が乱れた。

普段の夏澄なら理性が止めた。

伸ばされた腕を拒んでいたはずだ。 なのに、 今、夏澄は男の腕の中に囚われていた。

大きな手のひらが夏澄の背中を辿る。 それはひどく優しくて、 ずっとこの腕の中に囚われ っていた

いとさえ思ってしまう。

そんなことは望めるわけもないとわかっているのに。

じんわりと広がる快感に、肌がざわめく。

「何を泣く必要がある? 何も変わらない」

唇が離れた瞬間、

堪えきれずに涙が流れた。

夏澄の涙を見下ろした男が、吐息の重なる距離で囁く。

何も変わらない? 嘘つき……

きっと、 あらゆるものが変わってしまう。

この夜を越えた朝。夏澄は自分のすべてが変わってしまう確信があった。

変わらないのはこの男だけ。

ずっとそばで見てきた。 この何もかもを手に入れている男が、 日ごと夜ごとにその恋の相手をか

えて遊ぶさまを

名前を呼ばれるたび、 心が恋しさに痛んだ。

でも、この男には何も見せない。

今、夏澄が感じている痛みも、 明日の朝、 夏澄が覚えるはずの絶望も

8

絶対に見せない。この男が何も変わらないというのなら、何も変わらない自分でいよう。

秘めやかな決意を胸に、夏澄は笑う。

これは一夜限りの夢だ。 流されて、溺れて、我を忘れても、 これは夢

だから、明日の朝には何もかも、 跡形もなく消える。 消してみせる。

恋をした男の腕の中にいるはずなのに、 ひどい寂しさが夏澄の心に忍び寄る。

でもそれは夏澄だけが知っていればいい痛みだ。

蒼く輝く月が二人を照らす。

月明かりに照らされて、愛した男の綺麗な顔が見えた。

そっと指先を伸ばしてその頬に触れると、愛おしいぬくもりが夏澄を包み込む

愛しさと寂しさの狭間で、 夏澄は自分の恋の終わりを感じていた

雨夜の月

ル群。実に気持ちのいい一日の始まりなのに、目の前の光景はその爽やかさを台なしにしていた。 朝の 夏澄の目の前 一番に出社した夏澄は、今日も広がる社長室の光景に盛大にため息をつきそうになる。 爽やかな日差しが、 **-そこにあるのは夏澄の雇い主の執務机。** 広い社長室に差し込んでいる。 窓の外には、 初夏の真っ青な空と高層ビ

夏澄がきちんと片付けているというのに、 今日も今日とてその執務机は派手に散ら

かっている。

「一体……どうしたらこんなに散らかせるのよ?」

毎日のことなのに、思わず呟きたくなってしまう。 荒れきった執務机を前に、 夏澄はシャ ッツの

をまくると、気合を入れて掃除を開始した。

嘆いてみたところで社長の散らかし癖が直るわけじゃない。

それは彼に仕えるこの五年で嫌というほど実感した。

とどこに何があるかは把握している!!』とのこと。 社長曰く、『一見散らかっているように見えても、 俺なりの法則でものを配置 ている。 ちゃ

そのわりにたまに書類やお気に入りの万年筆が見つからずに、 机の上をごそごそと探している気

10

無造作に散らばった書類を手早くまとめて、社長がわかりやすいように並べる

デスク、書類が収められているキャビネット、ソファや応接セット、自分のデスクの順に次々と拭 いていった。 文房具や小物類を手に取りやすい位置に配置し、 デスクの上を片付けたら、 固く絞った雑 巾着

機をかけて掃除は終了 拭き掃除が終わったら最後に社長室と、 その手前にある自分の秘書室に隅から隅まで丁寧に掃除

らいに、夏澄の体に記憶されている。 この間、 約二十分。この五年間、 毎日繰り返してきた日課は、 目を閉じていてもできるく

綺麗になった室内に満足して、 夏澄は珈琲を一杯淹れると自分のデスクにつく

人気のない静かな社屋に、今はきっと夏澄一人。昼間は活気に満ちるこのビルも今はほとんど人でとけ まるで微睡から目覚める寸前のような心地よい静けさが満ちていた。

この束の間の朝の静けさが夏澄は好きだった。

贅沢な時間に小さな満足感を覚えて、夏澄は微笑む。

日本でも有数の複合企業体、 深見グループ社長の第一秘書

『社長秘書』という華やかなイメージからはかけ離れていて、 自身がモデルか俳優なみ

派手な容姿をしている社長曰く『地味!』の一言。

と言えば可愛いという程度の平凡な容姿だ。 身長一五六センチ。胸元まで伸ばした黒髪をきっちりと一つに纏め、 黒目がちの丸い瞳が可愛い

さはあるものの、 ローヒールのパンプスに、ベージュや紺、 女性らしい華やかさとは無縁だった。 黒等の無難な色のスーツを身に纏う姿は清潔感や清楚

セクシーさも必要ないと、右から左に聞き流している。 『もう少し身に纏うものを華やかにしろ!』と社長には言われているが、 仕事をするのに華美さも

夏澄の限界だと思っている。 機会も多いから見苦しくないように整えるものの、それで精一杯。 そもそも忙しすぎる社長の補佐をする身では、 見た目よりも動きやすさが優先。目上の人に会う 今の格好が、 おしゃ れが苦手な

珈琲を飲みながらメールのチェックをしたあと、各部署から上がってきている書類、 優先順に仕分けして社長のデスクの上に並べていく。

空いたスペースに社長が定期購読している大手全国紙、 次にその日の社長のスケジュールを確認して、 必要な書類の準備やお昼の手配を済ませる。 経済新聞の朝刊の束も置い

ようやく一通りの手配と確認を終え、 時間を確認すると九時十分前

もうこんな時間か。そろそろ……

外の様子を窺えば案の定、 ックもなく開け放たれた。 廊下に人の気配を感じて夏澄は立ち上がる。 秘書室は、 社長室の前室として設らえられているため、 次の瞬間、 社長室に行く 秘書室の扉が

夏澄は出社した社長を頭を下げて出迎える。

「おはようございます」

る深見良一は、じろりとこちらに視線だけを向け、無言のまま社長室に入っていった。 挨拶に応えは返ってこない。 顔を上げると、夏澄の雇い主でありこの深見グループの現社長であ

乱れた歩調と眼差しの鋭さから考えるに、 今日の深見はかなり機嫌が悪そうだ。

夏澄は嘆息まじりに天井を仰ぐ。

昨日、帰る時は普通だったのだから、 夜の間に何かあったとしか思えない

確か昨夜は、最近あまり仲のうまくいってなかったモデルの彼女とデートだったはずだ。

デート中に彼女と何か揉めたかな……

伊藤君……」

どうしたものかと考えていると、入り口から恐る恐るといった感じで、 声をかけられた。

振り返ると、 開け放たれた秘書室の入り口に、 秘書室長が気弱そうな笑みを浮かべて立っている。

「室長。おはようございます」

お、 おはよう。これ、社長に届けに来たんだけどね……」

手に持った書類を振る秘書室長の顔は、 かわいそうなほどに引きつってい

不機嫌な深見に廊下で遭遇して、 その怒気に当てられたのだろう。

「ありがとうございます。 今日の重役会議の資料ですか?」

「そう……。そうなんだが……」

夏澄は努めて何でもない顔で室長に歩み寄る。

とても怒ってるみたいだったけど、 何かあったのかね?」

資料を受け取った夏澄に、 室長が声を潜めて、 質問してくる。

ざま? どうでしょう?」

夏澄は肩を竦めた。

まさか、 彼女とのデートが失敗したみたいですとは言えない。

「伊藤君……大丈夫なのかね?」

「何がですか?」

「あんな社長と一緒にいて、 怖くないの かね?」

「慣れてますから」

深見グループの猛獣 使か い

さらりと答える夏澄に、 室長が尊敬の眼差しを向けてくる。不名誉なあだ名で呼ばれ、 夏澄は

がっくりと肩を落とした。

「そのあだ名、 いい加減やめてください……私は別に猛獣使いでも何でもありません

嫌を直せるのは!! 「いやだって、伊藤君くらいのものだよ? 情けないけど、 あんな恐ろしい顔をした社長に話しかけるなんてできない あの不機嫌そうな社長に平然と対応できるうえに、

13

を握って力説され、夏澄は苦笑せずにはいられな

に知られている彼は、 深見良一。今年三十五歳。経済界の若き帝王と呼ばれ、 祖父が興した建設会社を現在の複合企業体にまで発展させた。 強烈なカリスマ性を持った経営者として

調に業績を伸ばしている。 様々な分野の企業を戦略的事業投資によって次々に傘下におさめ、 不況が叫ばれて長い昨今も順

しかも深見は仕事ができるだけなく、 一人の男としても魅力に溢れていた。

のはっきりとした彫りの深い顔立ちは、 一八七センチの長身に逞しい体つき。 女が放っておかない色気を宿している。 少し癖のある黒髪を後ろに軽く撫で付けており、 目鼻立 ち

圧倒的なカリスマ性と強烈な存在感を持つこの男は、 日ごと夜ごと恋人をかえて派手に遊んでいた。 当然のようにいつも複数の女性たちに囲ま

お金、地位、 名声、容姿、才能、そして美しく華やかな恋人たち。 それが夏澄の雇い主だった。 人が羨むものすべてを手に入

機嫌が悪くなることもあるだろう。 ていることがある。 普段の彼は、どちらかといえば鷹揚で快活な性格をしているのだが、 理由はその時によってさまざまだが、 大企業の経営者としてのストレスや、 カリスマ経営者といえど人間。 恋人たちとの大小取り混ぜたトラブルな 時に不機嫌なオーラを纏 ストレスがたまることも 5

機嫌が悪いといってもせいぜい目つきが少し悪くなり、 足音が乱れるくらいで、 人に八つ当たり

るだけに威圧感が凄まじいのだ。おかげで周囲の人間はその威圧感に圧倒されて、 をするとか、あからさまに不機嫌な顔を見せるというわけではないのだが、顔が端整で存在感があ 傍に近寄ることすらできなくなる。 声をかけること

を出してもらって構わないし、それだけ自分があの帝王に信頼されていると思えば嬉しくもあった。 見が不機嫌さを全開で見せるのは、気を許した人間の前だけだと気づいてからはあまり怖くなく なった。夏澄に対しては時に癇癪を起こすこともあるが、二人でいる社長室の中でくらい素の感情 それに、あとで自分の態度を省みて、深見が反省しているのも知っている。 社長秘書に抜擢された当時は、 夏澄も不機嫌な時の威圧感にびくびくと怯えていたものだが、

他の秘書仲間はやはり不機嫌な時の深見が怖いらし 普段は本当に俺様のくせに、そういったところが深見の可愛いところだと夏澄は思うが、

ブの猛獣使いというあだ名がついてしまった。 そんな不機嫌な深見に平然と対応し、時に諫め、 宥めることもする夏澄は、 気づけば深見グル

「十時からの重役会議までに、社長の機嫌はなんとかなるかね?」

「どうでしょう? やれるだけはやってみますが……

時までに社長の機嫌を直してくれ!! そんな気弱なことを言わないでくれ!! 頼む!!」 社長の機嫌は君にかかってる!! どうか、

わかりました……

自分の父親と同世代の室長に手を握らんばかりに懇願されて、 夏澄は思わず一歩後ろに下がっ 7

15

頼むよ!! うちの社運は、君にかかってるんだからね!!

16

そんな大げさなとは思うが、 室長たちにとっては切実な問題なのだろう。

送ったあと、 最後まで「どうか頼むよ!! 預かった書類を机の上に置き、気持ちを切り替える。 ガンバってくれ!」と夏澄に発破をかける室長を苦笑しながら見

「さて、と」

淹れる準備をする。 気合を入れ直すと、 夏澄は秘書室の隅に併設されている小さなキッチンで、 深見のために 雅を

出社して一番に深見が求めるの は、美味し い珈琲。

この一杯が気に入らなければ、 途端にテンションが下がるため注意が必要だが、 この珈琲をうま

く淹れられればそれだけで機嫌が直ることもある。

だから、夏澄はこの朝の一杯に非常に気を使っていた。

不機嫌な深見が今日の朝刊を確認し、 気持ちを整理するまでの時間を見計らい 5 う

ドリップで丁寧に珈琲を淹れた。

不機嫌な時は甘い物を欲しがる深見のために、 マドレーヌを二つほど添える

時間を確認すれば、 深見が社長室に入って十五分ほどが経っていた。

ちょうどいい頃合だ。そろそろ深見の頭も少しは冷えているだろう。

夏澄はトレイに珈琲とマドレーヌをセットして社長室に向かった。

扉をノックすると短く不機嫌な低音で「入れ」と応えが返る。

「失礼します。珈琲をお持ちしました」

入室し声をかけると、 書類から顔を上げた深見が険しい眼差しでこちらを睨みつけてきた。

まだ少し早かったかしら?

いまだ不機嫌さ全開の深見に夏澄がそう思った時、 彼の眉間に寄せられた皺が、 トレイの上に置

かれたマドレーヌを認めて少し緩む。

大丈夫そうね……

かすかに和らいだ深見の表情を確認して、 夏澄はい つもの秘書の顔の下に苦笑を隠し、

持って深見のもとへ向かう。

差し出したマドレーヌと珈琲を受け取った深見が、無言のまま珈琲 に口を付けた

ある意味、 この瞬間が一日の中で一番緊張するかも……

珈琲を飲む深見の様子をそっと窺いながら、 夏澄は広げたままになっている新聞をきれい

カップ半分ほど珈琲を飲んだ深見が大きく息をつき、「すまん」と一言呟いた。

今日も自分が深見を満足させられる珈琲を淹れられたことにホッとする。 先ほどまで深見が纏っていた不機嫌オーラがかなり穏やかなものになったことを確認した夏澄は

こちらの様子を窺うように見る深見に、何も言わずに微笑んだ。

自分の態度を反省している深見に、 追い打ちをかけるつもりはない

「うちの秘書殿は優秀だな。 俺の機嫌の取り方をよく知っている

18

頭が冷えたのか、 深見はため息まじりにそう言うと、マドレーヌに手を伸ばし、 深見の雰囲気がいつもどおりのものに戻る。 かぶりついた。

マドレーヌを一つ食べ終えた深見がぼそりと「聞かないのか?」と尋ねてきた

「何をですか?」

何を聞かれているのかわかっていて、 あえて静かに問い返せば、 深見が再び小さくため息をつく。

「俺が 不機嫌だった理

そんなこと聞くまでもない。

深見の行動・思考パターンは、 彼の第一秘書として働いてきたこの五年でよくわかっているつも

まだ二十代前半と若いせいかプライドが高く、 昨日、 深見がデート していた相手は、 モデルをしているだけあって容姿はとても美しかったが、 わがままなところがあった。

最初のうちは、 彼女のわがままに付き合っていた深見も、 度重なるそれに限界を超えたのだろう。

もしくは深見がもっとも嫌う呪文を唱えたか。

その 一瞬でも匂わせると、 途端に深見は手のひらを返す。

誰にも囚われ 若く自信に溢れていた彼女は、 たくないこの若き帝王は、 自分であれば大丈夫と思い、 束縛を象徴するこの呪文を何よりも嫌っているの その呪文を使ってしまったのかもし

どちらにしろ、 深見の不機嫌の原因は、 考えるまでもなく昨夜の彼女とのデート。

しかし、 珍しいこともあるものだ。女性関係の愚痴を夏澄に言おうとするなんて……

拘らないし、愚痴を言うような男でもない。 に関わろうとはしない。 来る者は拒まず、 去る者は追わずの典型的なプレイボーイである深見だ。関係が終わった女には 興味がなくなったものに対しては、 いっそ見事なまで

えて必死にとりなそうとするが、深見はそれまでの態度が嘘のように冷ややかで、 それまで散々甘やかされてきた女たちは、 二度と自分には近寄らせないようにしてしまうのだ。 その呪文を唱えた途端に変わる深見の態度に、 取り付く島もな

そのしわ寄せはすべて夏澄に回ってきた。

過去どれだけ深見の女性関係のトラブルに巻き込まれ、 後処理に手を焼かされたかわからない。

とはいえ…

女性と揉めたあと、こんな気弱そうな深見の姿など見たことがなかった

|体調でも悪いんですか?|

思わずそう問いかければ、 深見の眉間に深い く皺が寄る。

「どういう意味だ?」

「言葉どおりの意味です。 睨みつけられて、 瞬、 そんなことを私に聞かれるなんて、よほどお疲れなのかと思いまして」 怯みそうになるが、 何事もなかったように平然と答える。

ることなんて何もない。それは深見もわかっているだろうに…… 必要とあれば愚痴でもなんでも付き合うが、こと恋愛関係におい て夏澄が深見にアドバ イスでき

20

真顔で問い返した夏澄に、深見がむっつりと黙り込んだ。

束の間の沈黙が二人の間に落ちる。

深見も自分がらしくないことを言ったと自覚したようだった。

「いや、いい……もう終わったことだった。忘れてくれ」

嘆息まじりにそう言うと、 深見は気持ちを切り替えるように残りの 珈琲を飲み干した。

「わかりました」

答えた夏澄は、深見が自分の顔をじっと見ていることに気づく。

| 社長……?|

夏澄の呼びかけに、深見は我に返ったように視線をそらした。

「すまん、 女の代わりはいくらでもいるが、 優秀な秘書殿の代わりはそうそうい ないなと思

7

「何ですか突然?」

いきなりの誉め言葉に喜びよりも不審が先立ってしまい、 夏澄の眉間に皺が寄る

「さあ、何だろうな? まあいい、伊藤。今日の予定は?」

に淡々と今日のスケジュールを告げていく。 一人何かを納得した様子の深見が話題を変えてくるのを訝しく思いつつも、 夏澄もいつもどおり

た時、「伊藤」と名前を呼ばれた。 そのまま打ち合わせをして多少のスケジュール変更をした夏澄がカップとトレイを下げようとし

はい?」

明日の午後七時から、何か予定は入っていたか?」

問われて夏澄は明日のスケジュールを確認する。

|明日の七時でしたらMN産業の営業部長が会食を希望されていますが?|

「ああ。そうだったか。悪いがその会食はキャンセルして、 七時からの時間を空けてくれ。 M N の

部長との会食は……今週中のどこかで調整してくれ」

「かしこまりました。 では明日の七時からの予定はどういたしますか?」

「いつものところを二名で予約しておいてくれ」

告げられたのは六本木にあるフレンチレストラン。さらに、二十代女性に人気のブランドのネッ

クレスと花束の手配を依頼されて、ああ、デートかと思う。

だろうとあたりをつける。 ため息をつきながら、 あそこのレストランを使用するということは、 夏澄は頭の中で素早く段取りを考えていく。 下手なものを手配すると彼女から嫌味が飛んでくるから面倒だと内心で 最近予定の合わなかった六本木のホステスの 同伴

花で思い出した。 レイカの舞台が今週で千秋楽を迎えるはずだ。 花の手配はどうなっ 7

本当についでに思い出したように、 ここ一年ほど付き合いのある中堅女優への手配を確認される。

「そうか、 わかった」

かった。 その後も次から次に、女性たちとのデート場所の予約と、プレゼントの手配を依頼され 間違わないようにメモを取りながら、 夏澄はあきれた気持ちが湧き上がってくるのを堪えられな

さっきまでの態度はなんだったのかしら。 心配して損した……

内心で毒づきながらも、 体調不良ではなさそうなことにホッとした。

秘書室に戻ってカップやトレイ、珈琲を淹れるのに使ったネルの後片付けをする。 自分のデスクに座り、プレゼントのリストを改めて見てため息をついた。 その後、

本当にお盛んなことで……

それぞれのプレゼントが被らないように配慮しつつ、デートに間に合わせて用意するのは本当に骨 これも秘書の仕事と割り切ってはいるが、常に複数いる深見の恋人たちの性格や好みを把握 こうして深見にデートやプレゼントの手配を頼まれるのは初めてじゃな

テルやレストランでデートを楽しんでいるのだから、 なかった彼女たちから嫌みや文句が飛んでくるのだ。当の深見はその年一番お気に入りの恋人とホ かくプレゼントを届けてもお礼を言われるわけでもない。それどころか、 族連れで賑わう街中を、彼女たちにプレゼントを届けるために走り回る羽目になる。 が折れる。 クリスマスシーズンなんて毎年地獄だ。クリスマスに浮かれた幸せそうなカップルや家 やってられないなんてものではない。 クリスマスに深見と会え しかも、 せっ

女たちは入れ替わるのだ。 面白がって余計に事態をややこしくすることは、 深見に文句を言ったところで、 あの悪行が改善するとは全く思えない。むしろ文句を言ったら、 目に見えている。どうせ数か月、長くて一年で彼

句を聞き流している。 いらぬ口出しをしないのが一番波風が立たないと、 最近はもう悟りの境地で彼女たちの嫌味や文

時々、不思議になる。

いくら顔が良くてお金持ちであっても、 あんな女癖の悪い男のどこがいいのだろう?

言った言葉ではあるが、夏澄にはその魅力がさっぱり理解できそうにない。 『誰にも囚われないあの自由な傲慢さが、あの人の最高の魅力なのよ』とは、 かつての彼の恋人が

さをずっと見続けてきたせいで、そんなものはきれいさっぱりと吹き飛んだ。 これまで一度も憧れめいた恋心を抱いたことがなかったとは言わないが、 間近で深見の女癖の悪

姿勢も尊敬している。しかし、仕事ならともかく、恋愛では絶対にあんな危ない男は選ばない。 容姿や地位が魅力的な男であることは理解しているし、 経営者としての手腕も、 仕事に向き合う

もうたくさんと思っている。 年がら年中、 深見の恋愛沙汰をすぐ傍で見せつけられてきたせいか、 恋愛ごとはお腹

ごとみたいな恋愛だった。結局キスを二、三回したところで、 してしまったような経験しかない。 もともと夏澄は恋愛には奥手で、大学の頃に付き合った人もいるにはいるが、それは本当にまま 先輩だった彼の就職を機に自然消滅

だいたい今は仕事が面白くて、 恋愛に興味は持てそうになかった。

24

経営者としての深見は夏澄にとって憧れだ。次々に新しい発想でもって事業を成功させていく手 その着眼点の確かさも学ぶことは多い。

んな男の背中を追いかけるだけで、 なのにどうしてだろう? 何だかんだと言いながらも、 何か新しいことを思いつくたび、 最近、 夏澄も深見の魅力に取り憑かれた人間の一人なのだ。 今の夏澄は精一杯。 子どものように目をキラキラと輝かせて、 慣れて何も感じなくなったはずのこの仕事に憂鬱さを感じるの よそ見なんてしている暇はなかった。 全力で走 ŋ そ

思わず零れそうなため息を堪えて、 プレゼントのリストを眺める。

「……この 女癖の悪さがなければ、 本当に尊敬できる上司なんだけどね」

プレゼントのリストを指先で弾きながらぼそりとそう呟く。

「ほお ー。面白いことを言ってるな。それはどこの誰の上司のことだ?

手元のリストがパシッと軽い音を立てると同時に、 低く艶のある声が聞こえ、 夏澄はぎょ っとし

て顔を上げた。

げつ、社長。 何で……?

社長……」

汗が流れる。 社長室の扉の前に立ち、 なぜか楽しげにこちらを見ている深見と目が合って、 夏澄の背中に冷や

で、 どこの誰の女癖がなければ尊敬できる上司なんだ?」

つりそうになった。 にやりと笑みを深めて、 深見が夏澄のデスクの前まで歩いてくる。 その追及に、 夏澄は顔が引き

「何のことでしょう?」

けてすっとぼけた。 慌ててプレゼントの一覧が書かれているシステム手帳を隠し、 夏澄は空々しい笑みを顔に張り

たのか教えてほしいのだが?」 「先ほど、 うちの秘書殿がずいぶん興味深いことを呟いていたんだ。ぜひとも誰のことを言っ 7

さすがに本人に面と向かって、 顔を覗き込んできた深見に、 夏澄は顎を引き、 あなたの女癖の悪さに呆れてますと言う度胸はない 少しでも距離を取ろうと背をのけ反らせる。

「何のことかさっぱりわかりません」

さっき聞こえたと思ったあれは、 俺の空耳か?」

今日はやけに絡んでくるわね。

りに玩具にされるのは御免だ。 たまらない。誰も聞いてないと油断して不用意なことを呟いた夏澄も悪いのだが、 っぱり昨日の彼女と何かあったんだろうなと思うが、 そのはけ口をこちらに持ってこられたら 八つ当たりまじ

「最近、お忙しかったのでお疲れなんじゃないですか? のスケジュールを減らしましょうか? 少しスケジュールを調整しましょうか?」 と目に力を込めて、 にっこりと告げる。

ここで一歩でも引いてしまえば、 深見の瞳がわずかに眇められ圧迫感が増すが、夏澄も負けじと微笑みを浮かべたままに睨み返した。 問い詰められた挙句に無理難題を吹っ掛けられる。 それがわかっ

ている以上、絶対に引くわけにはいかなかった。 無言のまま二人で睨み合う。

「いい度胸だな……伊藤?」

先に沈黙を破ったのは深見だった。

「何のことかわかりませんと先ほどから申し上げています」

あくまですっとぼける夏澄に、深見が大げさに肩を竦めた。

二人の間にあった緊張感が緩む。

「まぁ、 いいだろう。 今回は朝の件があるから見逃してやろう」

珍しく深見のほうから引いてくれた。

「精力的な社長にお仕えできて、 私もうれしいです。スケジュールは先ほど確認したままで大丈夫

深見が呆れたような視線を向けてくるが、夏澄は張り付けた笑みの圧力で押し通す。

「……たまに思うが、うちの秘書殿ほど強情で、 強気な人間もいないんじゃないか?」

「お褒めにあずかり光栄です」

さっさと話題を変えることにした。 皮肉に礼を返すと、深見がわざとらしくため息をついた。 夏澄はそれには気づかなかったふりで、

「そんなことより社長。何か用があったんじゃないですか?」

「ああ、そうだった。来週の会議に間に合うようにこの資料をデー タ化してまとめておいてくれ」

「わかりました」

差し出された付箋だらけの資料を夏澄は受け取る。

「頼む。 それと珈琲のおかわりを

それだけ言うと深見は社長室に戻っていった。

その背中を見送った夏澄は「助かった~!」と安堵の息を吐きながら、 珈琲のおかわりを淹れる

ために立ち上がる。 。そして、 くすりと小さく笑った。

資料と珈琲はきっと口実。いつもなら内線で済ませるような用事のために、 わざわざ顔を出した

きっと朝の自分の態度を省みた結果だろう。

こんなところがあの帝王の憎めないところだと夏澄は思う。

まして、 深見がそういう素の自分を見せるのは本当に気を許した人間だけと知っているから余計

にそう感じるのかもしれない。

ッチンに向かう夏澄の足取りは、 あのわがままだけど憎めない社長のために、 朝一番と違ってどこか軽やかだった。 美味しい珈琲を淹れてくるか……

27

「早川社長のところの創立記念パーティーです」「伊藤、次の予定は?」

「そうか、 わかりました。 無事に商談をまとめ、 わかった。パーティーに顔を出したあとは社に戻って、 手配しておきます」 社用車に乗り込むなり飛んできた深見の問い 中国支社の状況を確認したい」 に、 夏澄は即座に答える。

ほどにスケジュールは真っ黒に埋め尽くされている。 出張、各種フォーラムへの参加と、 深見の予定は分刻み。 休みを取る暇などな 11

パーティー会場であるホテルに到着していた。 の調査や上がってくる連絡に次々と対応し指示を飛ばしている。 せめて移動の間だけでも休んでほしいと思うのだが、 深見は今もモバイルパソコンを開いて市場 深見の指示がひと段落した頃には

にならないように、 息つく暇もなく会場に入った深見を、すぐさま人々が取り囲む。 壁際に下がって深見の様子を見守る。 一緒に会場に入った夏澄は邪魔

きつける何かが、 どんな集団の中にいようと、深見は目立つ。 こういう場所に来ると、 深見にはあるのだ。 深見はやはり特別な人間なのだと思わずにはいられなかっ 容姿が整っているのはもちろんだが、 自然と人を惹

まってきていた。 今も会場中の注目を一身に集めている。 一言でも深見と言葉を交わそうと、 人がどんどんと集

大勢の人間の中心で鷹揚に対応する深見は、まさしく王者の風格を纏っていた。

うちの社長はやっぱりすごい人でしょう?

な風に周囲の人間に自慢したくなっている自分に気づいて夏澄は苦笑する。

夏澄が自慢しなくても、 深見のすごさは皆が知っているというのに……

何を考えてるんだか……今日は移動が多かったから少し疲れてるのかしら?

は気を引き締める。 !以上の仕事量をこなしている深見は平然としているのに……まだまだ力不足な自分に、

「恋する女の子の瞳じゃな

立っていた。 六十代くらいのロマンスグレーの紳士と三十代後半くらいの一目で秘書とわかる男性の二人連れが 不意に背後から耳元に囁きかけられて、夏澄は驚きに声を上げた。耳を押さえて振り向くと、

「会長! 戸田さん!」

よく見知った二人連れに、夏澄の表情が緩む。

夏澄に声をかけてきたのは深見の父親 ―深見孝之とその秘書の戸 田だった。

継いだ建設業を発展させ、 孝之は今でこそ仕事を息子である深見に譲り、第一線から退いているが、かつては父親から受け ープの会長職に就く傍ら、 今の複合企業体の礎を作り上げた人物で、 趣味の会社をいくつか経営している。 夏澄の元雇い主だった。 深見に負けず劣らず元気に走 今は

り回っているため、会うのは数か月ぶりだった。

30

「久しぶりじゃな! 夏澄ちゃん。元気にしていたか?」

軽く手を上げてあいさつしてくる孝之に、夏澄も笑顔で頭を下げる。

「はい。ご無沙汰して申し訳ありません。 会長もお元気そうで何よりです」

「夏澄ちゃんの観察眼もまだまだだな。 わしは全然元気じゃないぞ? 実はな……」

途中で言葉を切って、内緒話をするために近寄るように指示される。 夏澄は何か病気でもしてい

るのかと心配しながら孝之に耳を近づけた。

くて元気が出んのだ」 「可愛い夏澄ちゃんを手放して、 むさ苦しい男の秘書一人に絞ったもんだから、 毎日、 毎日花がな

会長……」

真面目な顔をしてそんなこと言う孝之に、夏澄は思わず笑い出す。

「笑い事じゃなく大変なんだぞ? 「戸田は鬼のようにこの老体に仕事を押し付けてくるんだから」

「むさ苦しくて鬼のような秘書で申し訳ありませんでしたね_

孝之の背後にいた戸田が、冷たい声音で二人の会話に割って入った。

「何だ? 戸田! わしと夏澄ちゃんの内緒話を盗み聞きか?」

「聞こえるように言ったくせに何言ってるんですか。 しかし、 今日、 伊藤君の顔を見てお元気に

なったようなので、 明日からもっと仕事の量を増やしても大丈夫ですね」

大げさなリアクションで文句を言う孝之に、 戸田は冷たい 一瞥を向け、 ずけずけと切って捨てた。

「鬼か? やっぱりお前は鬼なのか?」

「それだけ騒ぐ元気があれば、仕事量を今の二倍にしても問題ないでしょう」

ほらな! 夏澄ちゃん、見てくれ! この鬼の所業を!!」

目の前で繰り広げられる二人のやり取りに、夏澄は懐かしさと慕わしさを覚えた。

澄が深見の第一秘書を務めることができているのは、この二人の教育のおかげだといっても過言で から孝之の第一秘書だった戸田には秘書のイロハのすべてを叩き込まれた。今、 たわけではなく、 就職したばかりの頃、夏澄は当時社長だった孝之の秘書を務めていた。今のように第一秘書だっ 大勢いる秘書の中の一人だったが、孝之には可愛がってもらった。そして、 曲がりなりにも夏

「戸田さんもご無沙汰をしております」

「伊藤君も元気そうで何よりだ。活躍は耳にしている。 夏澄が挨拶をすると、 戸田もそれまで孝之に向けていた鬼秘書の顔ではなく、 愛弟子の評判に私も鼻が高いよ 目元を緩めて微笑

「ありがとうございます。 まだまだ戸田さんの足元にも及びませんが、 精一杯務めさせていただい

喜びに頬が熱くなるのを感じた。 お世辞も追従も決して言わないかつての厳しい上司からスト トな褒め言葉をもらい、 夏澄は

戸田 わしを無視して夏澄ちゃんとい い雰囲気を作るな!! 浮気していたと嫁に言

31

微笑み合う戸田と夏澄の間に孝之が割り込む。

君に会うこともできたし、 「何を馬鹿なこと言ってるんですか……麗しい師弟愛を邪な目で見ないでください。 さっさと早川社長のところに挨拶に行きますよ」 さぁ、

32

もう少し夏澄ちゃんと話がしたい!」

「子どもじゃないんですから、駄々をこねないでください。 伊藤君。 またあとで時間

「だったら、ご自分で歩いてくださいよ!」 こら! 戸田!! わしは曲がりなりにもお前の雇い主だぞ? 襟首をつかんで引きずるな!!

を振ってくれる。 .田に引きずられるようにして歩き出した孝之が 夏澄はくすくすと笑いながらそれを見送った。 「夏澄ちゃん、 またあとでなー

言葉の意味を聞き忘れていたことに気づく。 のように騒がしかった二人が去ったあと、 夏澄は先ほど言われた『恋する女の子の瞳』

- 瞬、深見の顔が脳裏に思い浮かんでぎょっとする。
- それだけは絶対にない!
- あ りえない!! とぱっぱっと手を振って追い払う。
- やだ……今日は忙しかったから、 本当に疲れてるのかも? 帰ったら、 お風呂に入ってゆっ

くりしよう。

深見のことが思い浮かんだのは疲れによる気の迷いだと断じ、 夏澄は今の考えをさっさと忘れる

仲人するくらいのことはやりかねない。 だいたい、孝之は他人の恋バナが大好きなのだ。 誰かに恋をしていなくても、 やり手婆のごとく

手この手で、どんなことをしてでも二人を結びつけてしまう。 孝之は縁結びの名人として一部には非常に有名だった。 この二人が合うと直感で思ったら、

聞いている身としては、 孝之の仲人でうまくいったカップルはたくさん知っているが、その過程における無茶ぶりをも噂で だが、孝之の仲人はその成功率もさることながら、その方法も大変破天荒だと評判だ。 自分が仲人されるのはご遠慮申し上げたい。

考えてないで、 余計なことを聞かなくて正解だったかも? 仕事…… きっとあれは会長のいつもの挨拶。 馬鹿なこと

れていた。 気を取り直して、 深見はどうしているかと会場内に視線を巡らせると、 彼は相変わらず人に囲ま

皺を寄せたことに夏澄は気づいた。 深見が何か冗談を言ったのか、 彼を囲む人垣がどっと笑いに包まれる。 その瞬 間 深見が

一瞬の出来事だったので、 イルを浮かべて周囲と談笑を続けたが、 周囲の人々がそれに気づいた様子はない。 夏澄は深見から目を離さなかった。 深見もすぐにいつもの営業

を確認して、 会場を抜け出した。 注意深く深見の様子を観察していた夏澄は、 つの確信を持つと時間

「伊藤! どこに行っていた?」

なぎや挨拶は終わったのだろう。 いくつかの手配を済ませた夏澄が会場に戻ると、すぐさま深見が歩み寄ってきた。 一通りの顔 つ

「申し訳ありません。フロントで部屋の手配をしていました」

部屋?」

深見が怪訝そうにこちらを見やったあと、にやりと笑って夏澄の顔を覗き込んでくる

明日は槍でも降って俺は死ぬのか? 堅物の秘書殿からお誘いを受けるなんて……もちろん喜ん

でそのお誘いは受けるが?」

のある低音でからかいまじりに囁きを落とされて、 呆れるより先に、 夏澄は安堵を覚えた。

――こんな軽口を言えるのならまだ大丈夫ね……

「ええ、お誘いです。このあとの予定はすべてキャンセルしたので、お付き合い願えますか?_

にこりと微笑み、そう返せば、深見が驚きに目を瞠った。

一部屋にいつもの鎮痛剤を用意してもらっています。 少しお休みください

驚いたようにひょいとその整った眉を跳ね上げた深見が、 大きく息を吐き出した。

「うちの有能な秘書殿は、なんでもお見通しか……」

その言葉に、夏澄は自分の予想が間違っていなかったことを知る。

間にほんのわずかに寄った皺。それは寝不足の深見が時折起こす偏頭痛の前触れだった。 近くで見ると、深見の顔色が朝よりも青くなっている。周りで湧き上がる笑い声に反応して、

るまで我慢してしまうため、夏澄は気づいた時点で強制的に休ませることにしていた。 そかになる。そうして、睡眠不足になり偏頭痛を起こしてしまうのだ。周囲が気づかなければ倒れ 深見は自己管理がしっかりしているように見えて、仕事に没頭すると、 睡眠や食事がすぐにおろ

「お付き合いいただけますか?」

「喜んで……というか、俺に拒否権はないんだろう?」

「ええ。行きましょう」

見が顔をしかめてこめかみを揉んだ。気が緩んで頭痛がひどくなってきたのだろう。 に客の姿はなく、エレベーターの中は夏澄と深見の二人きりだ。 夏澄と深見は目立たないように会場を出ると、部屋に向かうためエレベーターに乗り込んだ。 周囲の視線がなくなった途端、

「大丈夫ですか?」

「ああ、大丈夫だ。これくらいなら鎮痛剤を飲まずに少し寝れば治ると思う。 悪かったな

社長のスケジュールを管理しきれなかった私の責任です」

いていたのに、頭痛を起こす前に休ませることができなかった自分に落ち込んでいた。 夏澄は短く首を振る。最近、深見が新規プロジェクトの立ち上げに夢中になっていることに気づ

「そんな顔をするな。

スケジュールに関しては俺のわがままだ。

それに普段は大人しい秘書殿を怒

鳴らせるほど頭痛はひどくないぞ?」

36

今思えば赤面ものの恥ずかしい過去を思い出させる深見の言葉に、 夏澄は思わず顔をしかめた。

「できればもうあのことは忘れてください……」

「それはできない相談だな。 伊藤のあの雄姿は今も瞼に焼き付い ている。 一生忘れることはな

としかできなかった。 愉快そうにからかってくる深見に、 夏澄は 「もう、 本当にやめてください……」と小さく呟くこ

崩した深見を夏澄は怒鳴りつけた上に、 それはまだ二人が一緒に仕事を始めたばかりのころのことだ。 説教したことがあった。 仕事のしすぎで体調を

『お茶くみくらいしかできない秘書ですが、わかることはあります。 寝てください!』 寝不足の頭ではいい考えも浮かびません。 そんな真っ青な顔で人に八つ当たりする暇がある 今、 社長に必要なのは休養で

思うし、できれば消してしまいたい過去だ。 いくら必死だったとはいえ、体調が悪かった深見を怒鳴りつけた自分の所業はあり得なかったと

てくる。 深見はこのエピソードが気に入っているのか、 ことあるごとに話題にして夏澄をからか

「あの時は本当に生意気なことを言いました。 申し訳ありません

んと向き合えるようになったんだ。感謝しているんだから、謝られるとこっちが困る あの時、 伊藤に怒鳴りつけられたからこそ、 今の俺がある。 おかげで他の奴らともちゃ

悟られたくなくて、 深見から不意にもらった感謝の言葉に、 夏澄の鼓動がどうしようもなく高鳴った。 動揺を深見に

ちょうど目的の階に到着し、 深見と夏澄はエレベーターを一緒に降りた。

一伊藤。部屋はどこだ?」

「こちらです」

出した。 深見の前を歩き部屋まで誘導しながら、 夏澄は乱れた鼓動を落ち着かせようと、 静かに息を吐き

少しは自分もこの帝王の役に立つことがあったのだと思うと、 あの出来事を社長があんな風に思っていたなんて知らなかった。 自然と心が浮き立った

っくりと休めるようにと、部屋はセミスイートを取っていた。

きないようにハンガーにかけてクローゼットに片付けた。 部屋に辿り着くと、 夏澄は深見の背後に回り、 上着を脱ぐのを手伝う。 受け取った上着は皺がで

億劫そうにネクタイを緩める仕草に、 一人掛けのソファに座った深見はひじ掛けに片肘をつい 何故か視線が吸い寄せられた。 ·τ τ 深く息を吐き出す。

ワイシャツのボタンが一つ、二つと外される。 覗いた首元にどきりとした。

38

惑いを覚える。 端整な顔に疲れを滲ませる深見。見慣れたはずのその光景から視線が外せない自分に、 夏澄は戸

疲れた男の表情に色気を感じ っていた。

りを覚える。 先ほど孝之に恋と言われて深見を思い浮かべたことと相まって、 自分のそんな心の動きに妙な焦

やっぱり、 今日はいつもより疲れてるみたい。 まあ、 社長でさえ疲れを隠せないのだから、

私が疲れていてもおかしくないか……

無理やり自分をそう納得させて、 夏澄は深見から視線を逸らした。

何か飲まれますか?」

「……頼めるか?」

「はい。ちょっとお待ちください

部屋に備え付けられていたポットでお湯を沸かし、 熱いほうじ茶を淹れる。

'社長。どうぞ、 お茶です」

「ああ、 すまない」

深見がお茶を飲んで一息ついている間に、 夏澄はポットを持って洗面所に向かった。

ひらが 浴室に備えられていたフェイスタオルにポットのお湯をかけて、 湯の熱さに赤くなったが、 夏澄は構わずにタオルに水気がなくなるまで固く絞った。 熱いうちにタオルを絞る。 手の

部屋に戻ると、 熱いタオルを深見に手渡す。

「社長。これ使ってください。 疲れている時は目元を温めると楽になりますから」

「わかった。やってみる……」

深見は夏澄に言われるまま、熱いタオルを目元にあてて温め始めた。

いいなこれ。 仕事帰りの居酒屋で、 サラリーマンがおしぼりで顔を拭く気持ちがわかる

リラックスした声で深見はそんなことを呟いた。

「鎮痛剤はどうされますか?」

「いや、これで大分楽になったから大丈夫だ……」

わかりました。 落ち着いたら寝室でちゃんと休んでください」

わかった」

しばらくソファで目元を温めたあと、 深見はぬるくなったタオルを手にして立ち上がった。

「三時間したら、 一度起こしてくれ」

「はい。私はこちらの部屋にいますので、 何かあればお声をおかけください

頷くと深見は夏澄にタオルを手渡して、 しばらくは寝室のほうで物音がしていたが、 寝室に入っていった。 やがて静かになった。 リビングル ムから寝室の様子を

さらに十分ほど待ってから、 夏澄は深見の様子を確認するため、 そっ

カップやタオルを片付け、

と寝室に入った。

静かな寝室に穏やかな寝息が聞こえて、夏澄はひとまず胸を撫で下ろす。

ているように見えた。 ナイトランプのほのかなオレンジの明かりに照らされた深見の顔色も、先ほどよりも幾分改善し

夏澄は深見を起こさないように気をつけつつ、 ハンガーにかけた。 ベッドの下に脱ぎ散らかされたズボンやワイシャ

サイドテーブルの上に、 ミネラルウォーターのペットボトルとグラスを準備する。

そして、深見に何かあってもすぐにわかるようにと、 ドアをほんのわずかに開けたままにして、

夏澄は寝室を出た。

リビングルームに戻り、 今度は自分用にお茶を淹れ

ソファに座ると、 一気に疲労が押し寄せてきた。

けれど、ここで休んでいる暇は夏澄にはなかった。

熱いほうじ茶を飲んで一息入れると、 夏澄は動き出す。

割り振りを依頼する。それと同時に、 出すと、本社に残っている他の秘書たちと連絡を取る。そして、 念のために深見を起こす予定時間をスマホのタイマーでセットし、鞄からタブレット端末を取り 来週までの深見の予定を緩やかなものに組み直した。 今日、 キャンセルした分の予定の

すべての連絡が終わったのは、 それから一時間ほどが経ってからだった。

窓の外はすっかり夜の帳が降りていた。 摩天楼がその真価を発揮しネオンを瞬かせ、

ばめたように地上を煌めかせていた。まるで天と地が逆さになったような光景は美しい。 O)華やかな光景をぼんやりと眺めた。

遠く高層ビルの端に月が顔を出していた。

今日は満月か……

地上のネオンの輝きの中、まるで恥じらうようにひそやかに昇る月は、 綺麗な円を描いていた。

小さなため息を零し、 夏澄は瞼を閉じる。

張りつめていた神経が緩んでいくのを感じた。

少しだけ……少しだけだから……

言い訳するでもなくそう思いながら、 夏澄は束の間の休息に身を委ねた。

不意に唇に柔らかいものが触れた感覚に、 微睡んでいた夏澄の意識が浮上する

V 皮膚の上に触れるそれは、 柔らかく温かかった。 覚えのあるようなないようなその感触の正

体が掴めず、 夏澄は瞼を開けた。

「……んっ。え……? 社長!?

況がわからなかった。 瞼を開くと驚くほどすぐ傍に深見の端整な顔が迫っていて、 夏澄は一 瞬 自分の置かれ ている状

あれ……? 何で、

驚きすぎて、思考がまともに働かな

42

「伊藤。 この手、 どうした?」

固まる夏澄に構うことなく、 深見が夏澄の手首を掴みながら問いかけてくる。

自分の手のひらを眺めて、 言われて、深見に掴まれている自分の手のひらを見ると、部分的 夏澄はようやく今の状況を思い出す。 にうっすらと赤くなっていた。

そうか。 社長を休ませるためにホテルを取ったんだ……って、 やだ、 私。 寝てたの

自分の失敗を悟り、 夏澄は一気に目が覚めた。

何 時 !?

ー申し訳ありません! 三時間: 後に起こすとお約束し てい たのに

ルのせいか?」 「いや、約束の時間前に勝手に目が覚めただけだから気にするな。それよりこの手、 さっきのタオ

くる。 慌てて謝る夏澄を意に介さず、 深見は夏澄の手のひらの、 火傷ともいえない赤味の 理由を問うて

言い逃れを許さない眼差しの鋭さに、 夏澄は戸惑いを覚えた。

深見が寝ている間にちゃんと冷やしたし、 に夏澄の手のひらの赤みは、 こんな風に深見に問われなければ、 先ほど深見に渡したタオルを絞った時に 夏澄は気にもしなかった。 もう痛みもない。 明日の朝にはきっと赤味も引い できたも

「痛みは?」

「大丈夫です。これくらいなんともありませんから」

「ちゃんと冷やしたのか? 薬は?」

「ちゃんと冷やしたし、もう痛みもありません。 薬なんて塗らなくても明日には消えてますよ」

「痕が残ったらどうする!!」

大袈裟です。社長に言われるまで忘れていたくらいなんですから」

深見の心配に夏澄は苦笑する。

普段、深見が付き合っている恋人たちであれば、 こんな風に火傷すれば大騒ぎになるだろう。

いいのだ。 しかし、 夏澄の手は彼女たちとは違う。 傷だらけだろうと、 この帝王のために働ける手であれば

そうは思っても、 荒れた手を深見に掴まれているという状況が恥ずかしくなってきて、

それは叶わなかった。 逆に痛いほどの力が深見の指に込められて、 夏澄は思わず顔をし

「……っ!」

「どうして……どうして、 お前は、そこまで……」

聞き取れないほどの声で深見が何かを呟いた。

社長?」

触れ ている深見の手がひどく熱くなっている気がして、 夏澄は動揺に声を上ずらせる。

夏澄の呼びかけに、 無言のまま深見が顔を上げた。深見と夏澄の視線が絡む。

その瞬間 まずい。そう思った。

何がまずいのか自分でもわからない。 でも、 このままではだめだと頭の中で警鐘が鳴る。

囚われる。このままだと自分は……

「社長こそ体調はどうですか? 頭痛は治まりましたか?」

少しでもこの雰囲気を壊したくて深見の体調を尋ねたが、 深見は何も答えない

場を支配する沈黙と緊張感に、 夏澄はどうすればいいのかわからなくなる。

深見の眼差しに絡め取られて、 身動き一つ取れない。

でも動きがあれば、 この張り詰めた空気は破裂する。 そうなった時、 自分がどうなるのか夏

澄にはわからなかった。

恐怖と紙一重の甘い緊張感が、 ぞくぞくとした予感となって夏澄の背筋を滑り下りた。

怖い……そう思うのに、 深見の手を振り払えない。

二人の均衡を破ったのは、 甲高い電子音だった。

夏澄が先程、深見のためにセットしたタイマーのアラー -ム音だ。

めた。 夏澄はハッとして深見から視線を離し、 掴まれていたのとは反対の手で、 スマホのアラー

次の瞬間、 抗えない力で手首を引かれ、 夏澄はソファから立ち上がらされた。

そして、そのまま抱き寄せられる。

「……夏澄」

名前を呼ばれた。この五年間、 一度も呼ばれたことのなかった名前を。

その瞬間、夏澄は自分もただの女でしかなかったのだと思い知る。

名前を呼ばないで……そんな聞いたこともないような、

甘い声で……

理性も、 戸惑いもその声に溶けて消えそうになる。

腰を抱かれて仰のいた視線の先。間近に迫った深見の瞳に宿る情欲の輝きに、 女としての本能が

ざわめいた。

ずっと憧れだと思っていた。ただの憧れだと思っていたかった。

なのに、今この瞬間に、はっきりと自覚する。

この想いは恋だったのだと

気づきたくなんてなかった。 囚われたくなんてなか つた。

近づいてくる唇を避ける術がわからず、 夏澄は泣きそうになる。

自覚したばかりの恋が、夏澄の心を惑わせた。

触れた唇の思わぬ熱さに、夏澄は震えるまま瞼を閉じる。

以外にどうすればいいのか、 わからなかった。

柔らかなその感触に、 先ほど夏澄を微睡から呼び覚ましたのも深見の唇だったのだと気づき、

乱はますますひどくなった。

の中は真っ白で、ただただ、 どうしようという言葉だけが巡る。

46

とするように、情熱的に絡む。 体の力が一気に抜けた。腰に回された手が、夏澄の体を深見に押し付けるかのごとく引き寄せた。 混乱 わずかに開いた唇に差し入れられた男の舌が、 して震える夏澄の背中を、 男の大きな手のひらが辿る。宥めるようなその手のぬくもりに、 夏澄の戸惑いも、 ためらいもすべてを奪い取ろう

唇に触れる吐息に、鼓動がひどく乱れた。

実感を夏澄に与えた。 深見が夏澄の 口内をかき混ぜる。 その慣れない濡れた感触が、 深見とキスをしているのだという

は完全に別物だった。 それはかつて恋人だった男と交わした、 互いの唇を重ね、 舌をなめ合っただけの不器用なキスと

く舌を吸われて、 まるで快楽を教え込むように、 吐息が奪われた。 深見の肉厚な舌が淫猥な動きで歯列を辿り、 上顎を舐める。

息苦しさから思わず漏れ出た自分の声は、驚くほど甘く聞こえた。

手のひらの優しさと矛盾する情熱的な口づけに、夏澄はもう何も考えられない。

普段の夏澄なら理性が止めた。 伸ばされた腕を拒んでいたはずだ。

なのに、 今、夏澄は男の腕の中に囚われていた。

大きな手のひらが何度も夏澄の背中を辿る。 それはひどく優しくて、 ずっとこの腕の中に囚われ

いたいと願ってしまう。

そんなことは望めるわけもないとわかっているのに……

突き飛ばして逃げるべきだと思っていても、深くなる口づけに体から力が抜けてしまう。

じんわりと高められる快楽に、体の奥が切なさに疼いた。

深見の唇と舌に翻弄され、眦にじわりと涙が滲む。

一瞬にも、 永遠にも思える時間が終わり、 唇が離れた。

堪え切れなかった涙が頬を流れる。 舌がもつれて、 まともに言葉が紡げない。乱れた自分の呼吸に羞恥を覚えて、 夏澄は目を伏せた。

「何を泣く必要がある? 何も変わらない。 怖いことはしない……」

なった。 夏澄の涙に気づいた男が、親指で頬を拭う。 その手つきが優しくて、 ますます涙が止まらなく

深見が囁くことに、 根拠なんて何もない

何も変わらない? 嘘つき。

きっと、あらゆるものが変わってしまう。 変わらないのはこの男だけ

この夜を越えた朝、 夏澄は自分のすべてが変わってしまう確信があった。

泣き出した夏澄を、 あやすように触れる深見の手。それが、恋しくてたまらない。

今だけの優しさなのだと知っているのに、 それでも、 今この時だけでもこの男を独占したいと思

う自分がいた。

この五年間、ずっと傍で見てきた。

48

のに、 仕事の上では尊敬できる上司であっても、その乱れきった私生活には呆れるばかりだったはずな 何もかもを手に入れている男が、日ごと夜ごとにその恋の相手をかえて遊ぶさまを。 気づけば自分もこの男の抗いきれない魅力に囚われていたのだと知る。

気まぐれに、相手をしてくれたとしても、それは今だけのこと。

この男が飽きるまでの期間限定の恋。未来なんて望めない。

わかっているのに……わかっているからこそ、 流されてしまえと自分の中 の女が囁いてくる。

未来など望めない関係だからこそ、今この時に溺れてしまいたい。

そんな破滅的な想いが、嵐のように心の奥から湧き上がる。

かった。 自分の中にこれほど強い感情が生まれたことに驚きつつも、 夏澄はその誘惑に逆らえそうにな

夏澄は戦慄く息を吐き出して、 自分でも馬鹿だと思う。 なのに、 覚悟を決める。 今この時にこの衝動を抑える術を夏澄は知らなかった。

たとえ、気まぐれでも構わない。

一夜限りの恋。

堅物で通した自分には望むべくもない夜。

男の上質なシャツに縋った時には、 体の震えも涙も止まっていた。

夏澄_

名前を呼ばれるたび、心が恋しさに痛んだ。

でも、この男には何も見せない。

今、夏澄が感じている痛みも、 明日の朝、 夏澄が覚えるはずの絶望も絶対に見せない

この男が何も変わらないというのなら、 何も変わらない自分でいよう。

秘めやかな決意を胸に、夏澄は涙に瞳を潤ませたまま笑った。

艶やかに、華やかに笑って、この夜を手に入れる。

これは一夜限りの夢だ。流されて、溺れて、我を忘れても、 これは夢。

だから、 明日の朝には何もかも跡形もなく消える。 消してみせる。

恋に堕ちていたことに気づいた瞬間に、 夏澄の淡い恋は終わる。それでい

恋をした男の腕の中にいるはずなのに、 ひどい寂しさが夏澄の心に忍び寄る。

でもそれは夏澄だけが知っていればいい痛みだ。

男の肩越しに青く輝く月が見えた。

あまりにも暗示的なその月の輝きに夏澄は笑い出したくなる。

『blue moon』

青い月。それはありえないことの代名詞。

自分の状況にぴったりすぎる青い月の輝きに、この恋はやっぱり叶わないのだと、そう思った。 無粋な自分にこの言葉の意味を教えてくれた目の前の男は、 同名のカクテルには『叶わぬ恋』『できない相談』なんて意味もあったことまで思い出す。 この状況をどう思っているのだ 今の

立ち読みサンプルはここま

に宿る情熱はわかるのに、 ふとそう思って視線を目の前の男に戻すと、こちらを見下ろす切れ長の瞳と目が合った。 今、男が何を考えているのかはわからない。 その瞳

わかる必要もないのだろう。

衝動を抑えきれずにそっと指を伸ばし、 衝動を抑えきれずにそっと指を伸ばし、その滑らかな頬に触れると、今までになく近づいた男の肌は、女の夏澄から見てもきれいで思わず いで思わず触れ 愛おしいぬくもりが夏澄を たくなる。

再び落ちてきた唇に、夏澄は瞼を閉じる。 青く輝く月の残像が瞼の裏に残った

力強く包んだ。

自分はきっとこの青い月に恋をしたのだ。

そう思えば今感じているこの痛みも切なさも、 少しは和らぐ気がした。

えないように、ただ、ただ慈しむように、 もう一度重なった唇は、 一度目の時とは色合いを変えていた。 触れるだけの口づけが与えられる。 強引に奪うのではなく、

「大丈夫だ……」

触れ合わせる唇は素直に気持ちいいと思えるのに、 口づけの合間に囁かれる言葉は、

残酷に響いて夏澄に痛みを覚えさせる。

もどかしさに耐えかねて、 もっと深くこの男に触れたくて、 何度も繰り返し角度を変えて唇をついばまれるたび、 夏澄は広い背中に腕を回して縋りつい たまらなくなる。 夏澄の中にもどかしさが募って

スが一気に深くなる。 自分から唇を開いて、 おずおずと舌を差し入れると、 先端だけをきつく吸われた。 次の瞬間、 丰

「……ふ……う……」

抱きしめる腕が強くなり、 抱擁の深さに体が震えた

遠慮なく差し入れられた舌が、 夏澄に口づけの甘さを教える。

何度も舌を吸われたせいで、敏感な舌の先端が痺れていた。それを甘噛みされて、 膝から力が抜

ける。夏澄の体が崩れて唇がほどけた。

たりと合わせるように重ね、夏澄のへその下に硬い何かを押し付ける。 咄嗟に縋った指で深見のワイシャツをきつく掴み、皺を作る。 まろみを帯びた部分をぎゅっと鷲掴みにし、 離れそうになった体を引き寄せた。 腰に添えられていた深見の手が滑 腰をぴ

に血が上った。 ベルトのバックルの無機質な硬さとは違うそれが深見の欲望の証だと気づいて、 夏澄の頭に一気

は形の良い眉をひそめ、まるで獲物を前にした肉食獣のような表情を浮かべていた。 耳朶に直接吹き込まれた囁きに、びくりと体が震えた。腕の中からおずおずと見上げると、 深見

遊び慣れ ているはずの男が浮かべている余裕のない表情に、 夏澄は息を呑む。

逃げるつもりも、

拒むつもりもなかったのに、

拒絶は許さないとい

わんばかりにますます腰を押し付けられる。

無意識に体が逃げを打つ。

けれど、

あっさり深見

欲望を隠さないあから

51